



東洋英和女学院

史料室だより No.104

2025.5.9 発行
東洋英和女学院
史料室委員会



©Okanoue Toshiko「彷徨」 Courtesy of The Third Gallery Aya

✿ 岡上淑子氏によるコラージュ作品「彷徨」

戦後、1950年代のわずか7年間だけフォトコラージュを制作し美術界を去ったものの、近年「幻のコラージュ作家」として再評価されている岡上淑子氏は本校の卒業生です。今号では、岡上氏が在籍していた戦時下の「東洋永和女学校」での生活を振り返り、創作の背景をたどります。

✿ 目次

特集	自由と豊かさの雫 ―東洋永和女学校と岡上淑子さん―	行司 千絵	……	2
展示案内			6
〈資料紹介〉	45 戦後80年特集			
	東洋永和女学校「クラス日誌」にみる戦時下の学校生活① 8		
〈報告〉	140周年記念事業から広がった歴史の学び 11		
〈東洋英和の先生がた〉	13 沓澤 謙一郎 先生			
	在職中も、退職後も、旅路の最後まで続いた知的「好奇心」 12		
史料室から、ごきげんよう	迷子の記念品たち、その後 14		
利用統計／史料室の活動より	(2024年10月～2025年3月) 15		



行司 千絵

謎めいたコラージュ作品

もう10年以上も前のことなのに、はじめて目にしたときの印象は今も鮮烈にある。それは、雑誌『mille』の表紙を飾ったコラージュ作品だった。

優雅な白いロングドレスを着た女性は、首から上が扇子になっている。背後は霧が立ち込め、ほのかに鐘楼が浮かぶ。シュールで不穏な雰囲気漂うのに、ファッションの優雅さもあり、なんとも不思議な魅力を放つ。

誰の作品なのだろう。気になって特集ページを読むと、約60年前、岡上淑子おかのうえとしこさんが20代で手がけたものだった。タイトルは「夜間訪問」。ほかにも作品が載っていて、それらはいずれも『VOGUE』『Harper's BAZAAR』『LIFE』などの風景やファッションブルな写真を素材にしたものだという。どれもがクラシカルな上品さがあるのに謎めいていて、こんな作品を作るひとがいるんだと興味深く記事を読んだ。

それから数年後の2019年、仕事で東京へ出かけた。3時間ほど空き時間ができたので、イベント情報を検索すると、東京都庭園美術館で展覧会「岡上淑子 フォトコラージュ 沈黙の奇蹟」が開かれていた。あの、コラージュのひとつだ。会期中に居合わせることができるなんて……とうれしくなり、すぐ白金台へ向かった。

僅かな制作時期

コラージュはもともと、岡上さん個人の楽しみごとだった。やがて、日本のシュルレアリスム運動をリードした美術評論家の瀧口修造によって才能が見いだされる。瀧口の部屋にあったマックス・エルンスト作品集から大きな影響を受け、岡上さんはひたむきに制作した。自らを作家と意識せず、美術界のありようにもとらわれず、自身のなかから沸き起こるイメージに真摯に向き合った。

1953年、神田駿河台下にあったタケミヤ画廊で初の個展を開く。作品は評判を呼び、劇作家の寺山修司から共同作品の提案が寄せられるなど注目され



岡上淑子「夜間訪問」 © Okanoue Toshiko「夜間訪問」 Courtesy of The Third Gallery Aya

たものの、さまざまな事情が重なり、美術界から姿を消した。手がけたコラージュは約140点。制作時期は1950年から1956年と、ごく僅かだった。

それから40年後の1996年に、岡上さんの作品にふたたび光が当たる。作品に魅了された東京の目黒区美術館の学芸員が岡上さんの消息を探しあて、企画展で作品を紹介した。その後、写真家でキュレーターの金子隆一さんの尽力によって、国内外で再評価の動きが生まれ、東京国立近代美術館や高知県立美術館、アメリカのニューヨーク近代美術館（MoMA）やヒューストン美術館などに作品が収蔵されている。

私が行った東京都庭園美術館の展覧会は、それらを一堂に集めた回顧展だった。平日だというのに、おしゃれな装いをした30～40代のひとでにぎわい、人気の高さに触れた思いがした。

会場には、コラージュのほかに、岡上さんが手が

けた写真や絵も展示されていた。その一角に服の型紙があり、岡上さんも洋裁をするひとだったんだと思わず足を止めた。

私はそのころ、詩人の茨木のり子さんと絵本画家いわさきちひろさんの小伝に取り組んでいた。ふたりはおしゃれが大好きで、自分で服を縫っていた。その共通項に着目し、幼少期から晩年に至るまで、どんな服をまとい、装いのセンスをどのように磨いたかをひもとくことで、それぞれの美意識を探っていた。

岡上さんについても、おしゃれの原点を知ることができたら、詩的で幻想的なコラージュが生まれた背景に触れられるかもしれない——。そんな思いに突き動かされ、小伝に岡上さんの章も加えることにした。装いの変遷やおしゃれにまつわる取材の申し込みをしたところ、コロナ禍と重なったため対面せず、電話でのインタビューが実現した。

東洋永和のセーラー服

岡上さんは1928年、高知で生まれた。3歳のころ、農林省（現在の農林水産省）に勤めていた父の転勤で東京へ移り住む。そのころに着たワンピースの思い出などとともに、東洋永和女学校時代の制服のエピソードを語ってくれた。

入学したのは1941年で、戦時下という理由で、元々の校名の「東洋英和女学校」の「英」が、「永」に改められた年にあたる。戦争は制服にも影響を及ぼし、高等女学校の制服を新調する際、全国統一版にするよう、国から通知が出されてもいた。

東洋永和女学校の場合、内部進学者はそれまでの制服を着た。現在とおなじデザインの東洋英和オリ

ジナル制服で、第15代と第17代の校長を務め、おしゃれに定評のあったミス・フランシス・ガートルード・ハミルトンが考案した。

外部入学者には、50人分の制服生地が配当された。国の通知が直前だったためか、オリジナル制服でも、全国統一版でもどちらでもよく、岡上さんはオリジナル版を選び、六本木のフランセ洋装店であつらえた。

岡上さんはそのときの気持ちを鮮明に覚えていた。

「制服を着るのがうれしかった。冬物のラインは白じゃないので、白い紐を買ってきて、お友達に教えてもらって紅茶で染めたの。あのころ物がなかったから、なんでも利用したわ」

冬服のセーラー服のラインの色は本来、東洋英和のスクールカラーのゴールドだ。戦時中はそれが叶わず、生徒がみずから紅茶で紐を染めて代用していた、と岡上さんの証言で知った。

女学校での日々は戦時下体制へと絡め取られていった。岡上さんが三年生になると、生徒全員にもんぺの着用と防空ずきんの持参が義務づけられた。岡上さんは上衣のセーラー服にもんぺを合わせて通



東洋永和女学校時代の岡上淑子さん（岡上淑子さん提供）



岡上さんの1学年下の1942（昭和17）年高等女学科入学の1年生（左：冬服、右：夏服）。この学年から、高等女学科の新入生は全国統一の制服の着用が義務づけられた。内部進学者だけセーラー服を着ている。

学したものの、ひそかにおしゃれ心をしのばせた。

「もんぺの裾はゴムを入れなくてはいけないのだけれど、そうすると、裾がひらひらしなくなるじゃない。それが好きじゃなかったから、ゴムは入れずそのままにして、見つからないようにしていたの」

四年生になると、学徒勤労動員が始まった。岡上さんは安藤電気蒲田工場へ向かい、雲母を切ったり、製図を手伝ったりした。東洋英和の法人事務局史料室には、このころのクラス日誌が収蔵されている。生徒が持ちまわりで記述する形式で、岡上さんが担当した日も残されていた。

昭和19年8月14日 月曜日 晴

当番 岡上淑子

今日は大そうむし暑うございましたが皆一生懸命に仕事を致しました

学校から中木先生がお出でになりました

朝礼の時、横田司令殿から欠席が多いとの御注意がございました

欠席をもっと少なくして皆楽しい気持で働けたらどんなに良いでせう

昭和19年8月15日 火曜日

今朝の集合はとても早うございました

午前中とても暑うございましたが午後夕立がありましたので少し風がありとても気持が良いのでお仕事ははかどりました

三時のお休み時間に小林先生がお出でになり食堂で讃美歌を皆そろって久し振りに歌ひました

学校時代の事がいろゝ思ひ出されて学校が懐しくなりました

昭和19年9月7日 木曜日 曇時々雨

雨が降ったり止んだりしましたので防空訓練は中止になりました

今日から第八十五臨時議会が行はれます

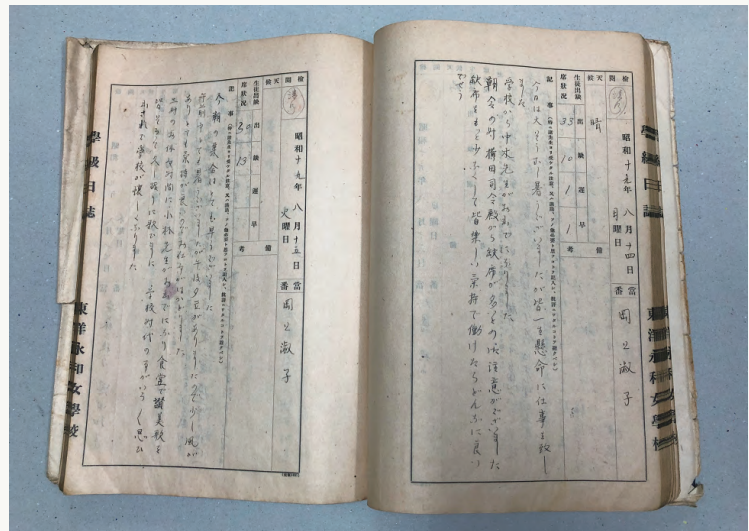
終礼の時は雨も止んで居りましたので横田司令殿及先生方と社庭で元気よくお別れを致しました

クラスメートに、岡上さんが現在も「るみちゃん」と親しみを込めて呼ぶドーヴァー留美さんがいる。ドーヴァーさんは『史料室だより』No.77で、安藤電気蒲田工場での勤労動員について証言しており、詳細を知ることができる。

東京大空襲のあった1945年3月、岡上さんは4年で繰り上げ卒業（本来は5年制）した。その後も山の手空襲とも呼ばれる空襲が相次ぎ、岡上さんの自宅の近くにも焼夷弾が落ちたが、幸いにも不発弾で被害は免れた。

学び舎がもたらしたもの

戦争はあらゆる美しさを否定し、排除した。だが戦時下においても、モダンで優雅な東洋永和女学校の校舎は建築や空間がもたらす尊さを、洒落たオリジナルの制服は装いの楽しさを生徒たちに言葉を介さずに伝えた。それは、豊かさの雫となって岡上さんの美意識を静かにゆっくりと育んだ。カナダからの宣教師らに教えを乞うたのも、意味深いものに



「級日誌 四年二組」のうち、岡上さんが当番だった日のページ（昭和19年8月14日、15日）

なっていた。岡上さんはこう語る。

「戦争をどこか冷めた目で見えるようになったのは、外国の映画をみたり、ミッションスクールで教育を受けたりしたのも、影響していたのではないかと思います。軍国少女として国を守っていましたが、平和を願いつつ、国を超えた大きな宗教的な枠を無意識に描いていたのかもしれません」

視座はひとつではない——。岡上さんは物事をさまざまな側面から見る大切さとその自由を、東洋永和女学校で学んだのだ。

敗戦後、岡上さんは恵泉女学園高等部家事科に進学する。ファッションの世界での自立を志し、小川服装学院を経て、文化学院デザイン科へ進むが、夢はかなわなかった。ただ、文化学院の美術の授業で、ちぎり絵の課題が出されたのがきっかけで、誰に教わるのでもなくコラージュに取り組んだ。その結果、唯一無二の作品を生み出したのだから、人生とは不思議なものだ。

岡上さんはかつて、コラージュした女性たちの思いについて、エッセーでこう綴っている。

彼女達は誇らしげに囁くのでした。

「私達は自由よ」と。

(「私とコラージュ」『机』

1953年4月号、紀伊國屋書店)

美や表現、心のありよう、生き方も含めて、あらゆるものが自由でいいのだ。きな臭さが漂い、生きづらさが蔓延する今、岡上さんがコラージュに込めたメッセージは胸に響く。そして作品の美しさは、観るひとたちにとっての豊かさの雫となり、まっさらな未来へといざなう力になっている。



〈執筆者プロフィール〉 行司 千絵 (ぎょうじ・ちえ)

1970年奈良市生まれ。同志社女子大学学芸学部英文学科卒業。京都新聞文化部記者。趣味は旅と洋裁。著書に『服のはなし—着たり、縫ったり、考えたり』『うちのふく—世界で1着の服—』など。今秋に『装いの翼 おしゃれと表現と—いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子』(岩波書店)と、祖父母らより遺されたものを辿るエッセー集『わたしのありかを語り継ぐもの』(仮) (palmbooks) を刊行予定。



1945(昭和20)年3月、4年修了で卒業した学年の卒業記念写真



岡上さんが学んだ時代のウィリアム・メレル・ヴォーリズ設計の校舎屋上(昭和20年3月卒業生のアルバムより)

特集記事ご執筆 行司千絵さん関連書籍と展示ご案内

【行司千絵さん書き下ろし書籍情報】

◆『装いの翼 おしゃれと表現と —いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子』(岩波書店)

絵本画家・いわさきちひろ (1918-1974)、詩人・茨木のり子 (1926-2006)、コラージュ作家・岡上淑子 (1928-)。同時代を生きた三人は、戦下の苦難の時期を経て、戦後、日々のおしゃれを喜びとしながら、独自の表現を生み出しました。行司さんが装いを軸にその三人の足跡や素顔に迫り、美意識の源泉や作品世界の魅力をひもといた、評伝を出版予定です。

岩波書店から2025年9月発売、四六判・上製・288頁
価格未定。詳細は後日、下記からご案内いたします。
岩波書店 <https://www.iwanami.co.jp/>

◆『わたしのありかを語り継ぐもの』(仮) (palmbooks)

行司さんは昨春、最も大切なひとを亡くしました。それを機に家の整理をしたところ、今は亡き、曾祖母や祖父母といったひとたちの遺品が出てきました。曾祖母の火鉢、祖父の舶来品の山高帽、チラシの裏に書き記された祖母の手紙、父の油絵。押し入れに眠るゆかりの品々をたどる旅が明かす、知られざる家族の肖像を、エッセーとしてつづります。

palmbooksから2025年10月発売予定、
価格等未定。詳細は後日、下記からご案内いたします。
palmbooksパームブックス <https://palmbooks.jp/>

【展覧会情報】

◆ちひろ美術館・東京 展覧会 「装いの翼—いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子」

書籍『装いの翼 おしゃれと表現と—いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子』(岩波書店)と連動した展覧会です。いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子は、第二次世界大戦後、それぞれ絵本画家、詩人、美術家として独自の表現を切り拓きました。本展では、「装い」をテーマに3人の女性作家の素顔に迫ります。それぞれの作品とことば、愛用の品や写真などを展示し、三者三様の美意識や生き方と、自由と平和を求める共通の思いを浮き彫りにします。

会 期：2025年10月31日(金)～2026年2月1日(日)まで
展示場所：ちひろ美術館・東京

〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2

TEL：03-3995-0612 / テレフォンガイド：03-3995-3001 /

FAX：03-3995-0680

詳しくはこちらをご覧ください。

<https://chihiro.jp/tokyo/exhibitions/89274/>



いわさきちひろ(左)、妹・世史子と(1939年)。映画「オーケストラの少女」のヒロインの衣装をまねて手づくりしたワンピースを着て
(写真提供：ちひろ美術館)

◆新美南吉記念館 企画展 「児童雑誌『カシコイ小学生』と新美南吉」

行司さんの祖父、藤本卯一さんは東京・神田にあった出版社、精文館に勤め、編集者をしていました。精文館は1932年に雑誌『カシコイ一年小学生』『カシコイ二年小学生』を同時創刊します。北原白秋が童謡顧問を務め、浜田広介の『泣いた赤おに』の初出誌であり、まだ無名だった新美南吉が童話を発表していました。『カシコイ』と南吉の関わりなどを紹介します。

会 期：2025年6月29日(日)まで

展示場所：新美南吉記念館 展示室

〒475-0966 愛知県半田市岩滑西町1-10-1 TEL：0569-26-4888 / FAX：0569-26-4889

詳しくはこちらをご覧ください。 <https://www.nankichi.gr.jp/Tenzi/kikaku.html>



精文館が出版していた雑誌『カシコイ一年小学生』『カシコイ二年小学生』

展示コーナーご案内

◆村岡花子文庫展示コーナー企画展

片山廣子と村岡花子 —文学をめぐる出会いと交流—

東洋英和の卒業生であり、翻訳家・児童文学作家として知られる村岡花子は、在校中に歌人の佐佐木信綱から、東洋英和の先輩である片山廣子を紹介されます。片山廣子は優れた歌人であり、さらには「松村みね子」の名で特にアイルランド文学の翻訳において功績を残しました。片山廣子との出会いは、のちに文学者として身を立てていく村岡花子に多大な影響を与えました。今回の展示では、村岡花子と片山廣子の交流に焦点を当てるとともに、東洋英和に残された貴重な片山廣子蔵書コレクションも紹介していきます。



会期：2026年1月9日（金）まで

◆学院資料展示コーナー企画展

沓澤謙一郎先生 ブログ全集刊行記念展示

沓澤謙一郎先生は、「くっちゃん」の愛称で親しまれた元中高部の理科の先生です。穏やかでユーモアあふれるお人柄が人気でした。

沓澤先生はご退職後、79歳となった2005年から、97歳となり永眠される10日前の2023年9月まで、19年間にわたりブログを書き続けました。

そのブログが、先生の最初で最後の担任クラスの教え子有志の方々によってブログ集（全5巻）となって書籍化され、東洋英和女学院に寄贈されました。今回の展示ではブログ集をお披露目するとともに、沓澤先生のご在職時代の足跡を紹介していきます。

※沓澤先生の関連記事は、本号12～13頁に掲載



会期：2025年9月27日（土）まで

入 場 料：無料 どなたでもご自由にご覧いただけます。

展示場所：東洋英和女学院 六本木校地 本部・大学院棟1階

公開時間：日曜日・祝日・長期休暇以外の9：00～20：00

（土曜日は9：00～19：00）

※館内の洗面室はご使用いただけません。／団体でのご見学の場合は、予めお知らせください。

〈資料紹介〉45 戦後80年特集 東洋永和女学校「クラス日誌」にみる戦時下の学校生活 ①

今年2025年は戦後80年の節目にあたる。今号と次号では、当時校名変更して「東洋永和女学校」だった学校で、太平洋戦争の戦中戦後において、生徒たちがどのような学校生活を過ごしていたのか、「クラス(級)日誌」の記載をもとに紹介していく。



クラス日誌の資料群

今号の特集にご登場いただいた岡上淑子氏は1941(昭和16)年に東洋永和女学校の高等女学科に入学し、1945(昭和20)年3月、4年修了時に繰り上げで卒業した、戦中世代にあたる。特集ページでも言及している当時の「クラス日誌」は、非常時における学校生活の様子を如実に伝える、貴重な資料となっている。幸いなことに本校の資料は空襲等の罹災を逃れたため、現在確認できる限りでは、戦中の39冊のクラス日誌が史料室に所蔵されている(10頁に一覧を掲載)。

太平洋戦争開戦

「昭和十六年度 クラス日誌 高等女学科第五学年二組」の1941年11月26日の生徒による記録には、「今朝のニュースは日・独・伊防共協定がもう五ヶ年延期される事になり加盟国は13ヶ国になりました」とあり、「B1クラスは、ハミルトン先生の会話〔英会話〕がしけん〔試験〕でした」と書かれ、校長職を辞したのちに一介の英語教師となり、宣教師の帰国が相次ぐ中で日本に留まったミス・ハミル

トンが授業している様子がかがえる。

その後、同年12月8日に太平洋戦争が開戦する。「昭和十六年度 クラス日誌 高等女学科第一学年一組」には下記のように記載されている。

昭和十六年十二月八日 月曜日 晴

生徒出欠席状況 出51人 欠0 遅0 早0

今日は学校(先生)の都合で授業が二時間だけでした 日英米戦争が始まりました 校長先生がこれからは一そう心をひきしめなくてはいけないとおっしゃいました

すでに1937(昭和12)年に日中戦争は始まっており、「なほ一そう」の覚悟をもって戦時体制に臨むよう、当時の校長である脇山司家太から訓話があったのだろう。翌12月9日には、礼拝の前に、前日に渙発された宣戦布告の詔勅の奉読式が行われたこと、11日には戦勝祈念のため宮城(皇居)、靖国神社に徒歩で参拝したことが記録されている(5年生は飛行場見学)。戦時体制下ということで、防空頭巾を作りモンペを穿き、1941(昭和16)年6月

からすでに学校行事となっていた宮城外苑勤労奉仕、学校農場（小金井）での作業がある一方で、聖歌のコーラス練習を行い、クリスマス礼拝は守られ、年度末の学芸会を行うなど、綿々と続いてきた学校の伝統行事は継続されていることがうかがえる。

そして、低学年の日誌では、元気でやんちゃな生徒たちが雪合戦でガラスを割って叱られるなど、屈託のない様子が見られる。しかし、学年が上がるごとに、同じ日の出来事であっても、上級生たちによる記述はより精緻になり、皇国のために奉仕しなければならないという強い使命感も増していく。

初めての空襲警報の記録

1942（昭和17）年3月、東京に初めての空襲警報が発令された日の高等女学科二年一組の記録は以下の通りである。

昭和十七年三月五日 木曜日 雨

今朝八時十分頃空襲警報がありました 皆、体操服に着換へて講堂に入りました 讚美歌無しの礼拝をしてから東先生の空襲が発令された時の御注意がありました 一時間目の終り頃空襲が解除になりました（中略）長野先生から「今朝の空襲は、敵機が三十三機、小笠原諸島の南鳥島に来て八機、撃滅した」とのお話がありました。

日誌からは、空襲の脅威が現実のものとなり、緊張みなぎる学校の空気が伝わってくる。こうして戦争は生徒たちの学校生活を直撃していく。

宣教師ミス・ハミルトンの帰国

ミス・ハミルトンは、戦争が始まり敵国人となりながらも、東鳥居坂町二番地の青楓寮内で生活していた。開戦翌年の1942（昭和17）年1月の新学期には、自発的に英語教師の職を辞し、授業を持つことをしなかった。教室から消えたミス・ハミルトンの存在を、生徒たちは気に留めていたことだろう。戦争は、身近なところで悲しい断絶をもたらした。

ついに「昭和十七年度 クラス日誌 高等女学科第〔五〕学年〔二〕組」には、交換船でカナダに帰

国するミス・ハミルトンについての記述が登場する。

昭和十七年六月二十日 金曜日 曇

朝、赤木先生からハミルトン先生のお話を少し伺ひました。お別れの御挨拶が出来なくて本当に残念でございました。

昭和十七年六月二十六日 金曜日 雨

長い間日本にいらっしゃって私達をいろいろおみちびき下さったハミルトン先生が一昨日御出発遊したとお伺ひし今朝の礼拝は特に先生の御無事と先生への感謝とお祈り致しました

高等女学科の生徒たちは直接ミス・ハミルトンに別れを告げることができなかった。ミス・ハミルトンの送別の礼拝は、青楓寮二階のパーラーで、僅かな関係者を集めて行われたという。

創設以来、常に学校を導き見守ってきた外国人宣教師がいなくなった校内では、華々しい戦果を上げる日本軍の映画を鑑賞し、「銃後の私達もそれにお報いできるやうにしっかりお国を護らなければならぬと感じさせられました」と生徒たちは高揚しつつも、実のところ日本が劣勢に転ずるに及び、次第に先生がたの訓話は切迫していく時局を鑑み、心を引き締めて生活するように指導がなされていく。

「高等女学校」となることの不自由と勤労働員

開戦後も東洋永和では、毎日の礼拝は続き宗教行事も行われていた。しかし1943（昭和18）年には世情を鑑み、東洋永和は国が定めるところの高等女学校令に従う高等女学校となるために、12月25日に女学校の学則から「基督教主義に拠る」という文字を削除し、1944（昭和19）年3月に「東洋永和高等女学校」となった。そのため同年4月5日より毎朝の礼拝が無くなる。四年生の日誌には「礼拝がなくなり何となく淋しい御在居ます」と書かれている。しかし、6月5日には「麻布教会で九時より礼拝がございますから希望者は出席する様にとのお話がありました」とあり、校外で何とか毎朝の礼拝を守るよう対策が講じられた。

礼拝が行われなくなったのと同じタイミングなのか、『東洋英和女学院百年史』には、1944（昭和19）年に講堂の「敬神」の額が外され、礼拝は宮城遙拝・軍人勅諭奉唱・職場行進に代えられたという同窓生の証言が掲載されている。

さらにこの年になると、3月に学徒勤労働員の通年実施が閣議で決定となり、7月には高等女学科三・四・五年生が学徒勤労に駆り出され、三・五年生は学校内に設置された沖電気東洋永和作業所、四年生は安藤電気蒲田工場に出勤する。12月には二年生も校内の工場に動員されるが、同年12月26日の二年三組の日記には、「午後からクリスマス礼拝

が講堂であり、讚美歌や交読文を光明先生しかい〔司会〕の下に、歌ったり、読んだり、おひるのたのしい一時を過しました」とある。一方で、同じ日に四年生は工場に出勤し、クリスマス礼拝に参加していない（ほかの学年は日記の所蔵がないなど、その日の記録が確認できない）。

在校生と教師たちの心の支柱を成していた毎朝の礼拝習慣を失い、学徒勤労に生徒たちが動員される大きな変化を迎えた1944（昭和19）年以降の日記については、次号で引き続き紹介を行っていききたい。

松本郁子（史料室）

東洋永和女学校 戦中のクラス日記一覧

資料番号	資料名	資料内容	年代
1201822039	昭和十六年度 クラス日記	高等女学科 第一学年一組	1941年～1942年
1201822040	昭和十六年度 クラス日記	高等女学科 第一学年二組	1941年～1942年
1201822041	昭和十六年度 クラス日記	高等女学科 第一学年三組	1941年～1942年
1201822042	昭和十六年度 クラス日記	東洋永和女学校 二年一組	1941年～1942年
1201822043	昭和十六年度 クラス日記	東洋永和女学校 二年二組	1941年～1942年
1201822044	昭和十六年度 クラス日記	高等女学科 第三学年二組	1941年～1942年
1201822045	昭和十六年度 クラス日記	高等女学科 第四学年二組	1941年～1942年
1201822046	昭和十六年度 クラス日記	高等女学科 第五学年一組	1941年～1942年
1201822047	昭和十六年度 クラス日記	高等女学科 第五学年二組	1941年～1942年
1201822049	昭和十七年度 クラス日記	高等女学科 第一学年一組	1942年～1943年
1201822050	昭和十七年度 クラス日記	高等女学科 第一学年二組	1942年～1943年
1201822051	昭和十七年度 クラス日記	高等女学科 第一学年三組	1942年～1943年
1201822052	〔昭和十七年度〕 クラス日記	第二学年一組	1942年～1943年
1201822053	昭和十七年度 クラス日記	高等女学科 第二学年二組	1942年～1943年
1201822054	昭和十七年度 クラス日記	高等女学科 第二学年三組	1942年～1943年
1201822057	昭和十七年度 クラス日記	高等女学科 第三学年二組	1942年～1943年
1201822058	昭和十七年度 クラス日記	高等女学科 第四学年二組	1942年～1943年
1201822059	昭和十七年度 クラス日記	高等女学科 第三学年一組	1942年～1943年
1201822060	昭和十八年度 クラス日記	高等女学科 第一学年三組	1943年～1944年

資料番号	資料名	資料内容	年代
1201822061	昭和十八年度 クラス日記	高等女学科 第二学年	1943年～1944年
1201822062	昭和十八年度 クラス日記	高等女学科 第二学年二組	1943年～1944年
1201822063	昭和十八年度 クラス日記	高等女学科 第三学年一組	1943年～1944年
1201822064	昭和十八年度 クラス日記	高等女学科 第四学年一組	1943年～1944年
1201822065	昭和十七年度 クラス日記	高等女学科 第四学年一組	1942年～1943年
1201822066	昭和十七年度 クラス日記	高等女学科 第〔五〕学年〔二〕組	1942年～1943年
1201822067	昭和十七年度 クラス日記	高等女学科 第五学年一組	1942年～1943年
1201822070	昭和十八年度 クラス日記	高等女学科 第四学年二組	1943年～1944年
1201822072	昭和十八年度 クラス日記	高等女学科 第五学年一組	1943年～1944年
1201822073	昭和十八年度 クラス日記	高等女学科 第五学年二組	1943年～1944年
1201822076	〔昭和十九年度〕級日記	一年一組	1944年～1945年
1201822077	〔昭和十九年度〕級日記	二年三組	1944年～1945年
1201822078	十九年 級日記	四年一組	1944年4月～1944年12月
1201822079	〔昭和十九年度〕級日記	四年二組	1944年～1945年
1201822080	〔昭和十九年度〕級日記	五年一組	1944年4月～1944年7月
1201822081	〔昭和十九年度〕級日記	五年二組	1944年4月～1944年7月
1201822082	昭和二十年度 級日記	四年一組	1945年1月～1945年3月
1201822083	〔昭和二十・二十一年度〕級日記	〔昭和二十年度 二年一組〕 〔昭和二十一年度 三年一組〕	1945年～1946年
1201822084	〔昭和二十・二十一年度〕級日記	〔昭和二十年度 二年二組〕 〔昭和二十一年度 三年二組〕	1945年～1946年
1201822086	昭和二十年度及ビ二十一年度 級日記（I）	〔昭和二十年度 一年二組〕 〔昭和二十一年度 二年一組〕	1945年～1947年



オリジナルのクラス日記の簿冊に、思い思いの千代紙などでカバーしているものも散見される。

昨年2024年に迎えた東洋英和女学院創立140周年にちなんで、学院では数々の周年事業が展開された。そのうち学院の歴史に関わる事業と、その広がりについて報告したい。

『東洋英和女学院140年史』刊行と記念講演会

2024年12月7日（土）13時より、新マーガレット・クレイグ記念講堂にて約220名の同窓生の参加のもと学院同窓会主催のクリスマス礼拝が行われ、礼拝後には『東洋英和女学院140年史』の監修者である水谷悟先生（静岡文化芸術大学教授、元中高部社会科教諭、現本学非常勤講師）による年史刊行記念講演会が開催された。



『140年史』では、東洋英和の歴史の主要なテーマを見開き2ページで読み切れるスタイルにして水谷先生が執筆した「史料が語る東洋英和の歩み」が収録されている。その中から講演会では「校歌」に焦点を当て、「校歌誕生の歩み～北原白秋「自筆原稿」と『同窓会会報』記事より」と題して、映像を交えての講話となった。北原白秋と山田耕筰という校歌制作のゴールデンコンビによる「東洋英和女学校校歌」が誕生するまでの従来の言説を、史料から再検証し、新たに村岡花子と山田耕筰の姉であるガントレット恒子との関係性を浮かび上がらせるなど、探偵さながらの水谷先生の資料探訪と解説の面白さに会場が沸いた。校歌3番の「東の道（ことば）」については、聖書からの引用であることを明らかにし、同窓生の校歌への理解がより深まった。好評を博したため、再び今年6月の同窓会総会での講演が予定されている。

『東洋英和のれきし』の授業での活用

子ども向けの年史である『東洋英和のれきし』が140周年記念事業として刊行され、小学部では早速に3年生の自校史授業「東洋英和の歩み」でテキストとして活用されることとなった。

教室での学びの後、12月16日には、授業の一環として小学3年生が本部・大学院棟の展示コーナー、

史料室を訪れた。『東洋英和のれきし』を読んだ後の児童の自校史への「自分事」としての理解、興味の度合いは深く、見学においても積極的な態度が顕著だった。『東洋英和のれきし』をテキストとすることで、子どもたちが東洋英和の歴史のみならず、近現代史を身近に感じながら歴史を学ぶ楽しさを習得できたこと、さらに、宣教師の先生がたに感謝の気持ちと、自分たちの学校に誇りを持つことができたことは、子ども向け年史活用の成果である。



『はみだし140年誌』による歴史記録

『140年史』『東洋英和のれきし』のほかに、140周年記念事業として『はみだし140年誌』（「はみだし140年誌」委員会編）も作成された。公式な記録として整理された年史ではなく、東洋英和の雰囲気や日常をより身近に感じてもらう内容を集めた特別な年誌として編集された。東洋英和の日常を紡いできた園児、児童、生徒、学生、卒業生、保護者や教員のエッセイや詩、絵が収録されているほか、現役の英和生や卒業生によって投稿された英和独特の言葉を集めた「あるある英和事典」も掲載されている。『はみだし140年誌』は、抜粋版を紙媒体であるタブロイド誌で発行し、全投稿はデジタルブックとしてWeb上で公開している。紙幅に限りがある紙媒体の年史に対し、新たな幅広い歴史記録の方法として発案され、多くの学院関係者に親しまれている。



『はみだし140年誌』デジタル版はこちらからご覧ください →



〈東洋英和の先生がた〉13 沓澤 謙一郎 先生

在職中も、退職後も、 旅路の最後まで続いた知的「好奇心」



「穴倉」の主だった沓澤先生

140周年記念に発行された『はみだし140年誌』の「あるある英和事典」の項目に【アナグラ（穴倉穴蔵）】とあり、「中高：古い校舎〔ヴォーリス設計の校舎〕1階にあった物理の先生方（沓澤先生と橋詰先生）の研究室。不思議な装置があり、紐をひっぱると何かが下りてきたりした」と解説されている。

この「穴倉」であった物理準備室と、その主であった沓澤謙一郎先生については、谷川祐子先生（元中高部社会科教諭）が生徒だった頃の証言がある。

「沓澤先生は教員室にほとんどいらっしゃらず、いつも物理準備室にいらっしゃいました。窓があるものの鳥居坂との高低差で半地下となっており、ほの暗く、秘密基地のような感じでした。無理やり先生がたに用事を作ってドアを開けると、アルコールランプでコーヒーを淹れていらして良い香りがしました。大人たちの空間という感じで生徒たちにとっては、なんとなく憧れの場所でした。」

物理準備室には、物理担当以外の国語科、英語科、聖書科など様々な教科の男性の先生がたが集まり、難しい議論をしたり、食べ物のことで盛り上がりしており、その中心にいて、いつもにこにこ笑っていたのが沓澤先生だったという。

説教はしないお人柄と研究の継続

沓澤先生は1951（昭和26）年に東洋英和女学院中高部に着任し、理科（物理、地学）と数学（代数、幾何）を教えた。先生が東洋英和に勤めることになったのは、大学の恩師の脇本教授と東洋英和の長野彌院長（当時）がお知り合いだった縁という。

先生の着任当時のあだ名は、獅子文六の『自由学校』の主人公で、育ちが良くおおらかな会社員の「南村いおすけ五百助」にちなんで「いおさん」で、後年は「くっちゃん」の愛称で親しまれた。

物理準備室のよき同僚であった橋詰正治先生（元

中高部理科教諭）は、沓澤先生をこう描写している。

「沓澤先生は、東洋英和の多くの生徒、卒業生、同僚に愛された。温和で、争いを嫌い、嫌（いや）と言うのが苦手だった。悪さをした生徒に説教をするのを見たことがない。子供は叱責を受けると反発する。説教をされないと自らそっと反省するようだ。」

そのように穏やかで優しくあった沓澤先生の、最初で最後の担任学級の教え子たちは、先生の定番“怖い話”（怪談話）をしょっちゅうおねだりし、高2・3のホームルームでは好きなことをさせてもらったそうだ。東京タワーを見学したり、有栖川公園まで散歩して「学校には内緒ですよ」とアイスクリームを買ってもらったり。機材持ち込みのカラオケやイントロあて大会。先生の誕生日にはエンジのベストをプレゼント。「あんなに自由に過ごした高3は他にいないと思う」と話している。

そして、先生は日本私学教育研究所の物理専門委員として全国私立中学高等学校理科研修会で研究報告を行い、全国の理科教員の教育・指導にも携わり、日本の理科教育の底上げに貢献した。ほぼ毎年、東京都私立学校教育研究費補助金を得て実験を行うなど、常に研究と発表を怠らなかった。サイエンスプロデューサーの米村でんじろう先生とは理科授業勉強会などでの付き合いがあった。女子校の物理の先生がたの研究会もあり、女子高生に分かりやすい物理のテキストも作ったという。

「沓澤先生の記念品」

沓澤先生が、35年の教員生活を経て定年退職を迎えるにあたり、先生が決断実行した出来事について、再び橋詰先生の証言を紹介したい。

「当時、中高部では退職者が、残る教職員に記念品を渡すという慣習がありました。例えばコーヒーメーカーを贈れば、先生たちは休憩室でコー

ヒーを飲む。沓澤先生は『僕はそういうことはしたくない。生徒や卒業生の役に立つことを残したい』と語り、『それで先生にお願いがあります』と言われた。大学への入学試験で「指定校推薦」というのがある。当時、沓澤先生の母校の東京理科大学理学部は、東洋英和に推薦依頼をしていなかった。沓澤先生は大学の同窓生保坂氏の仲介で理科大の理事長会談を取り付け、沓澤・橋詰の2人で訪問することになった。会談は順調に進んで理学部の『指定校推薦』が決定した。」

1986年3月に沓澤先生が定年退職されてのち、1987年に2名の卒業生が「指定校推薦」制度で東京理科大学に入学し、現在まで続くこの枠による東京理科大学入学者は1993年までに合計10名にのぼった。「沓澤先生の記念品」はこうした形で学院に残された。

79歳からの19年間にわたるブログの執筆

「年寄りには年寄りらしく 突飛なことを避けて過ごすのが 良いと言うのが 私が日ごろ 思っていることである この考えを 裏切るのが 私の好奇心だ」とご自身で語っているように、沓澤先生の「好奇心」は生涯止まらなかった。退職後、世田谷区代田に「沓澤教育物理研究所」を開設し、「秘密基地」として橋詰先生もまじえての研究が続いた。本当は理科の実験が出来る塾みたいなのをしたかったそうである。大好きだった旅にも出かけ、トルコ旅行(2005年)、韓国旅行(2006年)、学院創設者ミス・カートメル墓参りしたカナダ旅行(2007年)、思い出深い野尻キャンプサイトの改築感謝キャンプ参加(2008年)と、4年続けて旅行を決行したのも、沓澤先生の「好奇心」ゆえだった。79歳となった2005年からは、「kutuzawa's diary」と題してブログ(Web上で日記や記事などを作成・管理するもの)を次々とアップし、97歳となり永眠される10日前の2023年9月8日まで、19年間にわたりブログを書き続けた。ブログの話題は多岐にわたり、ご自身で撮影されたたくさんの写真も掲載され、先生の機知に富んだ穏やかなお人柄と語り口により、ブログ上での交流も広がった。

沓澤先生がご逝去されたのち、先生の担任学級の教え子有志(沓澤先生が「乙女軍団」と命名。老後の先生を何くれとなくお世話された)が、橋詰先生、



沓澤先生を囲んでのクラス会(2019年5月25日)

内藤達先生(元中高部数学科教諭)とともに、沓澤先生のブログを末永く皆の記憶に残せるようにとブログの書籍化を目指した。先生の一周年となる2024年9月にブログ集(全5巻)が完成し、東洋英和女学院に寄贈された。

沓澤先生は「死」という「絶対的な無」「大きな忘却」についてたびたび考察している。最晩年のブログで先生は「今の私は 終わりよし の状態を感じている 言葉を換えると 幸福感をも感じている と言っていいだろう」と答える。先生の書き物からうかがえるのは、先生がキリスト教の教えによって「死」という「大きな忘却」を乗り越え、亡くなる直前まで物事を「好奇心」に満ちて探求し続けた生き方である。ブログ集は、そうした沓澤先生の思索の軌跡をたどる大事な記録となった。

松本 郁子(史料室)

※沓澤先生の展示情報は、本号7頁に掲載

沓澤 謙一郎(くつざわ・けんいちろう)先生 一略 歴一

1925年11月26日	山形県で誕生
1944年	東京物理学校入学
1947年	東京物理学校卒業
1949年	東京理科大学理学部物理学科3年に編入
1951年3月	東京理科大学理学部物理学科卒業
4月	東洋英和女学院中学部・高等部に着任(理科教諭)
1968年～	物理部顧問を担当(～1985年度まで)
1986年3月	東洋英和女学院を定年退職 退職後、「沓澤教育物理研究所」を開設
2023年9月18日	永眠(享年97歳)



迷子の記念品たち、その後

「史料室だより」前号 (No.103) にて、4点の記念品について来歴をお尋ねしましたところ、うち3点に関する情報が集まりました。情報をお寄せくださった方がたに心より御礼申し上げ、下記の通りご報告させていただきます (敬称略、括弧内は旧姓)。

情報提供：K.O. (中高部英語科教諭)



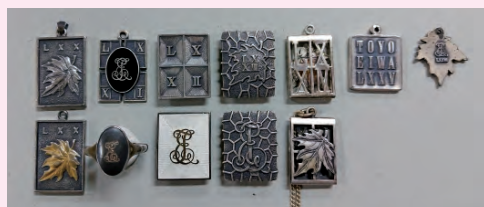
2004年夏にカナダのトロントで行われたハンドベル世界大会にハンドベル部が参加するための引率をした際に、お土産として購入したものと思われる。6～8個セットになっていてとても重かったと記憶している。

情報提供：上田 (菊池) 綾子 (1992年高等部卒)、加藤牧菜 (1995年高等部卒)、森重 (村松) 恵子 (1996年高等部卒) ほか



1990年度楓祭において生徒会 (会長：上田牧子) と楓祭実行委員会 (委員長：大島花子) が「自然保護キャンペーン」の企画として販売したもの。予約販売650個、当日販売350個以上、合計売上は1,000個を超え、売上利益22,640円は生徒会中央委員会の楓祭収益と合わせて日本自然保護協会に寄付された (東洋英和女学院中学部高等部生徒会発行「楓」第34号、1991年を参照)。SOSは“Save Our Sphere”の略。

情報提供：塩澤 (成川) 和子・岡部 (松ノ井) 和子 (1960年高等部卒)、T.T. (1956年高等部卒)



(左) 来歴をお尋ねしていた記念品
(右) 1956年 (第70回卒業生)～1962年 (第76回) の卒業生記念品
(試作品含む。チェーン付を除き、平坂家より寄贈)

1960年高等部卒業生の卒業記念品。裏面の「LXXIV」はローマ数字の「74」で「第74回卒業生」を意味する。また、1956年高等部卒業生から情報を受け、洒落たデザインは故 平坂暉雄氏によるものと判明した。平坂氏は長野彌元院長とYMCAを通じてお繋がりがあり、創立70周年行事のプログラムや記念バッジのデザインなども担当した。夫人は東洋英和女学院短期大学の卒業生。平坂氏のデザインによる卒業記念品は1956年卒業以降、10年ほど続いたと思われる。



(右) 平坂暉雄氏
(左) 長野彌元院長



なお、未だ情報が得られていない記念品は、校章の入った小箱です (直径約8cm)。お心当たりのある方のご連絡をお待ちしております。



連絡先：〒106-8507 東京都港区六本木5-14-40 東洋英和女学院法人事務局史料室
TEL/03-3583-3166 FAX/03-3583-3329 E-mail/archive@toyoeiwa.ac.jp



利用統計 (2024年10月～2025年3月)

		10月	11月	12月	1月	2月	3月
展示見学者数		113	92	83	82	110	87
展示見学者区分	学内関係者	38	36	27	37	47	23
	一般	75	56	56	45	63	64
		10月	11月	12月	1月	2月	3月
資料閲覧者数(累計)		6	3	7	6	7	9
閲覧者区分	本学学生・生徒					1	1
	現教職員	3		6	2	2	3
	旧教職員						
	同窓生・学院関係者		1	1	2	1	1
	同窓生(研究者)						
	学外研究者・学生	3	2		1	3	4
	一般				1		
利用の目的	年史編集			4	4		1
	著述・論文作成			1	2	3	2
	伝記資料調査	1	2			1	3
	記録類の調査・研究	5	1	2			3
	学院広報関係						2
	その他					1	
資料の種類(重複あり)	東洋英和関係	6	3	6	6	6	7
	カナダの教会関係			1	1		1
	村岡花子関係						1
	周辺地域史						
	その他					1	
		10月	11月	12月	1月	2月	3月
月別レファレンス件数		17	18	14	11	16	10
質問者の区分	本学学生・生徒						
	現教職員	11	8	5	4	7	8
	旧教職員	1	1			1	
	同窓生・学院関係者	3	2	5	3	2	
	同窓生(研究者)		1			1	
	学外研究者・学生	1	4	3		4	1
	学外研究機関		1		1	1	
	一般	1	1	1	3		1
質問内容(重複あり)	資料所蔵調査	7	4	4	7	5	3
	写真所蔵調査		1	1			1
	事項調査	9	10	4	3	7	2
	その他	2	3	5	3	4	6

史料室の活動より (2024年10月～2025年3月)

(☆は複数回)

2024年10月

- ☆編集／校正『東洋英和のれきし 資料編』(子ども向け年史の教師用の副読本)
- ☆来室／調査—東洋英和幼稚園教諭。幼稚園園舎記録集作成のため、過去の写真や建物の変遷についてなど
- ☆照会／校正—東洋英和幼稚園園舎記録集作成関連
- ☆来室／調査—「はみだし140年誌」委員。掲載予定事項の事実確認、画像検索ほか
- ☆照会／校正—「はみだし140年誌」作成関連
- ・執筆—大学礼拝週報(松本・三笠)
- ・資料貸出—中高部入試広報担当教諭へ、クリスマス音楽会関連ファイル、河野和雄先生作成ファイル
- ・執筆／画像提供／データ提供／校正—大学図書館より依頼あり。「図書館だより」No.326特集のため
- ☆校正—「学院総合案内」など各部刊行物の年表や沿革、青山霊園宣教師リストなど、140年史編纂で改められたデータと照合、修正
- ・来室／調査—中高部図書教諭。昔の図書室の画像検索、生徒たちの図書室利用について(展示のため)
- ・出張—大学礼拝奨励のため(三笠)

2024年11月

- 5日—中高部創立記念日週間礼拝お話(三笠)
- ☆照会—学外研究者より、脇山司家太について
- ・11日—「史料室だより」No.103納品、発送
- ・照会—中高部事務室と確認、卒業時の黄色いラップ水仙について→①銀の水盤は東光会が創立70周年時に寄贈
- ②1965年高等部卒業生の情報では、ラップ水仙は飾って

- あったが、一人ひとりの生徒には配られず。高等部卒業式、短期大学卒業式と使い回しだった
- ・19日—故芝恭子本学名誉教授(元史料室委員)お別れの会(霊南坂教会)参加(松本・三笠・酒井・谷川)
- ・照会—三里塚教会初期の伝道師小篠よし氏について→元短期大学図書館職員(1950-1954)と判明
- ・出張—カナダ大使館にて梶原由佳氏(トロント公共図書館勤務、「史料室だより」No.96執筆者)講演「オズボーンコレクションについて」に参加(松本・三笠)
- ・照会—卒業生(研究者)より、福音館の前身の会社を金沢で創設したカナダ人の宣教師について→パーシー・プライス。参考資料を送信

2024年12月

- ・打ち合わせ—平体由美史料室委員長と大学展示品の選定
- ・7日—桜プロジェクトリユニオン(三笠)
- ・7日—同窓会クリスマス礼拝、水谷悟教授(静岡文化芸術大学)年史刊行記念講演会参加(各史料室委員)
- ・11日—「東洋英和のれきし 資料編」校了、入稿
- ☆打ち合わせ—カートメルセンター展示等設計(松本)
- ・16日—小学部3年生が自校史授業「東洋英和の歩み」の一环として史料室、展示コーナーを見学
- ・16日—第15回 140年史編纂委員会(最終回)
- ☆照会—行司千絵氏より①制服の制定者②ハミルトンのフルネームについてほか
- ☆資料整理—村岡家寄贈の書簡資料(元職員梶田マリ氏協力)
- ・19日—「東洋英和のれきし 資料編」納品
- ・来室／調査—院長。全学院クリスマス礼拝の始まりについて→戦後すぐの全院祈禱会からの変遷を説明

2025年1月

- ・照会—院長より、1965年植樹の楓は今どこに→1965年3月中高部新聞部発行「東洋英和新聞」の植樹のニュースを紹介、当時の植樹位置までは特定
- ☆学院資料展示コーナー企画展準備
- ☆記念品、寄贈品整理(目録確認)

- ・来室／調査—他校大学院生。訓令12号をめぐる東洋英和の対応ほか
- ・21日—学院資料展示コーナー展示替え
- ☆村岡花子文庫展示コーナー企画展示について、村岡恵理氏と打ち合わせのち、展示準備
- ・28日—中高部地歴部ボランティア（写真整理）

2025年2月

- ☆資料整理（逐次刊行物、他校史、聖書・讃美歌）
- ・照会—大学図書館経由、他校より、ピリー・グラハムの宣教大会関連記事はあるか？→中高部新聞部発行「東洋英和新聞」107号に掲載あり
- ・中高部社会科教諭より、中高部における新共同訳聖書への切り替え時期について、調査結果をお知らせいただく
- ☆打ち合わせ—大学教員と次年度フレッシュマンセミナー「自校史」と「東洋英和の歴史」授業の構成など
- ・7日—第3回 史料室委員会
- ☆執筆／編集／校正—「史料室だより」No.104
- ☆来室／調査—学外研究者。メサイア合唱の歴史について
- ・照会—大学図書館より、横江幸氏について→明治33年卒業生、旧教員
- ・執筆／校正—「楓園」100号「史料室レター」39ほか
- ☆校正—奥田実紀氏『図説 赤毛のアン』コラム
- ・案内—沓澤謙一郎先生の教え子たちが展示コーナーを見学
- ・来室／調査—学外研究者。ピアノ資料などを閲覧
- ・校正—中高部母の会総会資料。母の会コーラス部使用の英語校歌歌詞をめぐって
- ・調査—1943年卒業アルバム「ヴォーリズ」自筆の英語校歌歌詞掲載について→近江兄弟社藪秀実氏に問い合わせ
- ・木島伸子氏（元職員）が1940年代に国指定の制服とセーラー服の着用が混在している写真を抽出、画像DBに格納
- ・照会—同窓生より、「TETE」について→「楓」を調査し1992年度生徒会により発定と判明
- ・来室／調査—中高部前生徒会長。生徒会資料など
- ・校正—「楓美」30号、年史関連ページ

2025年3月

- ・片山廣子書簡、鷺谷由美氏（元職員）に文字起こしを依頼
- ・140周年事業準備委員会反省会（松本）
- ・三里塚教会についての吉村隆子氏（卒業生、建築家の吉村順三ご息女）と山本佳典氏との面談に陪席（松本）
- ・来室／報告—中高部生が史料を活用した探究授業の報告
- ・「クラス日誌」資料保存処置（約40冊）（昭和21年の日誌からカナダ日系強制収容所高校の年次報告を発見）
- ・来室／調査—大学平体由美教授。「史料室だより」特集執筆のため、吉田ルイ子について
- ・打ち合わせ—総務課と『140年史』増刷検討（800冊）
- ・資料提供—西脇克治氏より、沖電気労働員関連資料
- 27日—村岡花子文庫展示コーナー展示替え
- ・執筆—「東光」62号史料室コーナー

【おもな移管資料】

- ・中高部母の会より、中高部地下倉庫にて長年にわたって保存されてきた資料のうち会長ファイルなど
- ・法人事務局総務企画部総務課より、学院新年度礼拝・クリスマス礼拝資料、後援会資料
- ・中高部より、個人PC導入時の協議記録ファイルほか
- ・院長室より、小池久子元中高部英語科教諭が旅先で購入した革の聖画2点
- ・山本香織前小学部部長より、小学部東日本大震災関連資料ファイル、新型コロナウイルス関連資料ファイル

【おもな寄贈資料】

- ・創立70周年記念鉛筆・バッジ（木箱入り）／セルロイド小箱（オレンジ色、校章入り）／台服（長袖夏服）用校章ワッペンほか

- ・高橋温子元中高部英語科教諭より、「ハミルトン先生を送る歌」楽譜／故南波シゲ先生追悼記念礼拝／故吉本てう告別式次第／アイス彫りのペーパーナイフ（1958年6月の高2北海道修学旅行の記念に札幌東光会から全員に贈られたもの）／A.R.ストーン宣教師葬儀順簿ほか
- ・1949年3月頃の寄せ書きノート／1951年野尻学荘の葉書（富岡正男先生や額田年氏のメッセージ記載）／『東洋英和バスケットボール部 70年史』編集関連資料一式／バスケットボール部の活動を中心としたアルバム／1945年東洋英和女学院入学からの行事アルバムほか
- ・昭和20年繰り上げ卒業の同窓生の遺品。モンペ姿などの写真3葉／軍事工場での寄せ書き／Birthday Bookの寄せ書き／葉半紙に刷られた卒業証書
- ・1995年高等部卒の同窓生より、中高部時代の資料をデジタル化したデータ
- ・同窓生（1943年高女科卒）の小学科から高等女学科までの各種行事アルバム／卒業アルバム（紀元2603年＝1943年）
- ・村岡家より、村岡花子書簡資料等多数
- ・宮脇花倫選手（パリオリンピック出場フェンシング選手。2012年中学部卒）の新聞記事一式
- ・小学部叶田光恵教諭より、小学部学年だより（製本したもの）1986年度～1992年度（7冊）ほか
- ・亀井佑子元中高部家庭科教諭より、「B.M.新聞」3部ほか
- ・卒業記念ネックレス、「野尻タイムス」第2号ほか多数
- ・佐々木肇氏（元職員）より、村上陽一郎元学長著作多数

（書籍・雑誌・論文）

- ・三宅拓也氏（京都工芸繊維大学助教）より、『松ノ井覚治の建築ドローイング ニューヨークで学んだボザール建築』京都工芸繊維大学美術工芸資料館、2022年
- ・宗恋（在校生高山絵恋氏）『迷惑な愛縛』新山文庫、2024年
- ・植田亜里沙中高部図書教諭より、『株式会社ブレインテック ユーザー会記録集 2023』2024年4月（事例発表 東洋英和女学院中高部図書室「みんなで作る図書室」掲載）
- ・高橋貞二郎院長より、高橋貞二郎、増田琴監修『未来への言葉 クリスマス・エンディングノート』日本キリスト教団出版局、2024年
- ・講談社と村岡恵理氏より、村岡花子訳『クリスマス・キャロル』講談社、2024年
- ・吉田ルイ子『ハーレムの熱い日々』ちくま文庫、2024年
- ・小出（安江）いずみ氏（1969年高等部卒）より、安江いずみ編『追憶 安江明夫』日外アソシエーツ、2023年／安江いずみ編『書物の世界に生きる 安江明夫著作集』3巻と別冊、日外アソシエーツ、2024年
- ・津田道夫氏より作山宗邦著『遺愛学院史探求』2024年
- ・押川理佐氏（1989年高等部卒、1993年大学卒）より、『きらきらティアラ ゆめいっぱいプリンセス』（3話目「あさつゆのプリンセス」執筆）フレーベル館、2025年
- ・橋川壽子氏（1965年高等部卒）より、橋川壽子「片山廣子・松村みね子（1878—1957）について」所収『軽井沢高原文庫通信』第104号ほか
- ・島田博司教授（甲南女子大学）より、島田博司「RIWAC研究シリーズ 島根大学教育学部小学四年課程 初の子卒業生のライフヒストリー 樺太出身の小学校教師・島田徳子氏の場合」（島田徳子氏の母の千佐子氏が東洋英和女学院附属幼稚園師範科出身者）
- ・「会員が綴る九十年」東京YWCA、1995年

【おもな画像提供】

- ・「はみだし140年誌」のため11点（キャプテリアの丸テーブルなど）
- ・ハンドベル部50年史のため13点（旧校舍画像など）



番組公式HP

NHK Eテレにて 4月5日より放送中
毎週土曜日18:25（予定）
毎週木曜日19:20 再放送（予定）

原作は、世界中で愛されているモンゴメリ著・村岡花子訳「赤毛のアン」シリーズ（新潮文庫刊）。日本でも1952年に翻訳版が出版されて以来、70年以上にわたって愛されてきた不朽の名作です。今なお色あせないこの物語が、新たな青春物語となってアニメーションシリーズ『アン・シャーリー』としてよみがえります。プロデューサーは1982年高等部卒業の中山佳子さんです。

★ 資料ご寄贈のお願い

史料室では、学院の歴史や学校生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。お手許にあってご不要のものがございましたら、ご寄贈いただけますと幸いです。また、卒業生および教員の方々の著作も収集しています。

【お問い合わせ先】 東洋英和女学院史料室
〒106-8507 東京都港区六本木 5-14-40
Tel 03-3583-3166（直通） Fax 03-3583-3329
E-mail archive@toyoeiwa.ac.jp